フォーラム　政治経済秩序再編へ　より深まった議論　神奈川新聞-1990.12.21

第3種郵便物認可

政治経済秩序再編へ

討論出席者

（50音順、敬称略）

飯田 経夫（国際日本文化研究センター教授・理論経済学）
加地 伸行（大阪大学教授・中国哲学史）
金 日坤（韓国・釜山大学教授・経済学）
孔 繁（中国社会科学院世界宗教研究所長・中国哲学史、儒学）
鈴木 幸夫（横浜国立大学教授・経済政策、景気予測）
長 幸男（東京外国語大学名誉教授・日本経済思想史、金融論）
中島 嶺雄（東京外国語大学教授・現代中国論、国際関係論）＝コーディネーター
溝口 雄三（東京大学教授・中国思想史）＝コーディネーター

――次回開催へ向けて 総括フォーラム

永遠を求める生命論が本質

―― 加地

多様な価値の混在にも寛容

―― 孔

日中韓の儒教「相違」に注目

―― 長

柔軟な「生命力」

溝口　日本の近代化過程の中で、古いと思われていた儒教が、実は柔軟な生命力を持っていて、ヨーロッパと結びつける形での儒教の再発見といいますか、資本主義発展への道を開いたという、儒教と近代化という問題が一つ。それから民族的な差異、文化的な差異についてもっと知る必要がある。われわれはあまりにもアジアの近代、あるいは近代に接続するこの三百年来の歴史について知らなさすぎる。もっとアジアを知る必要がある。韓国ではどうなんだろう、中国ではどうなんだろう、という素朴な疑問が、実は専門家の間でも十分に解明されていない点があります。そういう差異を認識した上で、統合の問題も考えなければいけない。

そこで第一の問題が経済と文化の問題、第二の問題は差異と統合の問題になるが、各先生からご意見をいただきたい。

加地　私は中国哲学史が専門だから、経済学や会社経営の経験はない。現象を離れ、本質を追究するのが私の仕事です。儒教と現代がどうかかわるか、その間にはたくさんの連鎖、媒介があります。

溝口　アジアの文化が共通して持っている「生命の尊重」を強く強調された。次に孔先生から注文、感想を述べていただきたいと思います。

孔　儒教文化圏の各国固有の儒教に、同じ儒教でも非常に違いがあると言われたが、これは非常に重要なことです。この「違う」というところに儒教の優れた点があると思う。一方で、儒学が統一性を持っているということだ。儒教の影響を受けた国の文化は、差異を含みながらも大きな方向は一致しているという、差異と一致の微妙なバランスの上にある。もう一つは価値観の多元化ということです。また、今後のことについては、漢字文化が今後の現代化についてどういう方向に進むかについていろんな方面から研究していかなければならないと思う。それはするものが多いと思う。それをどうつないでいくかがきょうの議論であると思う。私はやはり本質的なところを押さえることが大事だと思う。

それでは本質は何かといえば、たった一つだけ、それを知ることが儒教の本質ではないかと思っている。それは生命論です。過去から現在、未来へつながる命というものの永遠を求めている。魂の形であれ、未来の子供であれ、そういうものを求めている気持ちをとらえたものだと私は思っている。すべてはここから始まります。

溝口　続いて金先生、長先生、飯田先生、鈴木先生というふうに発言順にまとめをお願いします。

金　今回のシンポジウムでは出なかったが、なぜ儒教を主に論ずるのかという問題です。道教、仏教、キリスト教、神道などいろいろあるが、この中でなぜ儒教が重要かといえば、やはり社会組織の原理を持っているのは儒教だけで、他の宗教は社会性を持っていない。

溝口　引き続き長先生お願いします。

長　中国、韓国における儒教と日本の儒教とでは、同じ儒教といっても、儒教そのものの自覚的な解釈か、儒教を社会の中の制度に組み込んできたやり方も随分違うということで、これからそれぞれの儒教の違いを十分見定めながら、しかもその間のミューチュアルアンダースタンディングが可能な研究がなされることは大変いいと思う。

高い教育水準

飯田　日本経済は、平等主義でうまくいってるんじゃないかと言った。すると金先生は平等主義というのは儒教における家族倫理の延長だということをおっしゃったが、別の言い方をすると教育熱心ということがあるのではないか。田畑を売っても子供に教育を受けさせようというのは韓国にも日本にもあり、恐らくこれは儒教の伝統の一部分であろうと思う。その教育熱心ということは非常に大事で、国民一人ひとりが勝手気ままにものを言い出した時には、言うことの中身の水準が国、社会のありようを決める。上等な社会かそうでないかを決めるということだろうと思う。やはり日本を含めて東アジア諸国で、国民の教育水準が高いということは、将来に希望を抱かせることではないかと思う。

溝口　質の高い健全な大衆社会をどういうふうにつくるかという問題こそ二十一世紀の課題だというのは、全くお説の通りです。最後に鈴木先生よろしくお願いします。

鈴木　日本の場合も共同体意識は重要だ。個々の企業、業界、国家という形で共同体意識を持つことによってここまで成長できたものが、邪魔になってきている。従来型の共同体の発想であっても外で道理を言い張ってみんなの仲裁を仰ぐことになる。共同体といっても非常に違うわけです。

第一回漢字文化フォーラム「儒教ルネッサンスを考える」は十一月二十八、二十九の両日、横浜（会場は横浜プリンスホテル）で開かれた。

主催　漢字文化フォーラム実行委員会、神奈川県日本中国友好協会

後援　外務省、文化庁、神奈川県、日本中国友好協会、日本中国文化交流協会、神奈川県教育委員会、横浜市教育委員会、川崎市教育委員会、横須賀市教育委員会、朝日新聞社、神奈川新聞社

協賛　神奈川経済人文化会議、日本中国教育交流協会

第二回漢字文化フォーラムは「漢字文化の受容・変容と発展性」（仮題）のテーマで、日本、中国、韓国、北朝鮮、台湾、香港、ベトナム、シンガポールの八地域の参加を呼びかけ開催される予定。期日は来年十月下旬から十一月中旬の二日間の段取り。

討論のまとめ

東京外国語大学教授　中島　嶺雄

より深まった議論

アジアの共通基盤　見極める努力を

漢字文化フォーラムが状況的にも時期的にもタイミングを得て開かれ、かつ論議も従来の一般論を乗り越えた内容で展開されたことに意義があったと思う。この議論は今後、深めなければならないし、その課題の一つは、果たして儒教文化圏なり、儒教ルネッサンスなり、漢字文化圏と言ってもいいと思うが、こういう問題がどれだけ普遍性を持ち得るかということだと思う。国際化とか国際的な相互依存関係とか、ボーダーレスという言葉が出てきているように、地球大で物事を考えなければいけない時代に、いわばアジア地域に特殊な問題だけをわれわれが取り上げていていいのかという問題があると思う。やはり東アジアなりアジア地域に、もっと普遍的な問題としてわれわれが何を発信できるのか、それは同時に異文化収していくだけの度量を持っていないと、いわば一種の、中華思想が中国だけじゃなくて中国文化圏全体に広がって、一つのネオアジア主義みたいなことになっていくあるいは欧米なりもっとほかの世界なりそういうものをわれわれが十分吸収していくべきだ。

ドイツ統一の背景には、脱社会主義と脱冷戦という問題があるが、同時に見落としてならないのは、ヨーロッパには共通基盤がある点だ。翻って、アジアにはどういう共通基盤があるのか。例えば中国の民族音楽を奏でると、韓国の人は不快に、インドの人は敵意を催すという。日本の伝統音楽も初めは珍しいかもしれないが、そのうち退屈だといわれる。こういうことを考えても、アジアというのは非常に多様な質性の上に成り立っている。その中で私どもが今後どういう共通基盤をつくっていくかということを考えない限り、ヨーロッパの冷戦なり脱社会主義が行われたからといって、アジアはそのまま幸福になれるとは思えない。やはり、私どもは儒教文化圏なり漢字文化圏というものが持っている公益性というものを、もう一遍、個別の差異を通じて再確認すると同時に、いかにして共通基盤をつくりあげ、同時に普遍的な全世界の問題になり得るかという問題を考えていくのかという、大変な宿題があるような気がする。

この宿題は、第二回、第三回の漢字文化フォーラムで問い続けていくが、参加された皆さんのアンケートを拝見すると、大別して二つの方向が出ている。一つは漢字そのものについてもっと考えたい、という要望で、これは非常に大事なことだ。表意文字としての漢字が持つ一種の情報機能や、学習思考との関係、また、これからの情報産業型社会、知識集約型社会に欧米と違った問題を提起しているんじゃないかという点は、もっとわれわれは議論してもいいと思う。

また、中国では五一四運動によって、日本は近代化の過程において、儒教を一遍突き放したと思う。それ故に逆に今、ルネッサンスとして評価し得る面もあると同時に、そうであるが故に、儒教が今、皆さんの生活を日常的にとらえていて、強い規制が毎日あったらこんな議論はしたくないということになるかもしれない。儒教と道教や仏教、神道との関連という問題も、漢字文化圏が次に取り組んでもいいテーマではないかと思う。